1993年1月15日発行　1975年2月28日第3種郵便物認可
毎月1回15日発行
定価／150円
年間購読料／2,000円
（送料共）

編集／緑の地球ネットワーク（準）
Green Earth Network

大阪市港区市岡元町3丁目9－16　西建ビル
TEL.06-583-1719 FAX.06-583-1739（〒552）
郵便振替　大阪4－128465

COM21 通巻306号　発行／COM企画室

緑の地球
GREEN EARTH

地球環境のための国境をこえた民衆の協力

●中国からの新年メッセージ……P 3
●オーバーシーズ・レポート……P 4～5

「よくきたなあ！」
黄土高原で出会った笑顔

1993・1
12

21世紀、緑の地球再生に向けて

今春GENは正式発足します！

緑の地球ネットワーク準備会世話人会

会員のみなさん！　読者のみなさん！

新しい年の草木が芽吹く4月、「緑の地球ネットワーク」は正式発足いたします。

この1年間、準備会は「地球環境のための国境をこえた民衆の協力」をかかげ、具体的な行動の積み上げをつうじて、すこしずつ道をきりひらいてきました。

その重要な一歩が、中国・黄土高原における壮大な森林再生プロジェクトへの協力です。多くのみなさんから寄せられた緑化協力資金 250万円は27万本の苗木となり、現地・渾源県の人びとの手で95ヘクタールの大地に植えつけられました。

そしてこの1年に、のべ27人の会員と友人が現地を訪れ、協働の植林に汗を流し、相互の理解と信頼をふかめてきました。厳しい自然条件のもとで、環境修復に自分たちと未来世代の生存をかける人びとの努力を目のあたりにし、私たちの今後の道すじもより鮮明になったと思うのです。

また私たちは、講演会や自然と親しむ会をつうじて、私たちのよりよい生き方を考え、新しいなかまとめぐりあい、数多くの先輩グループと協力関係をうちたてることもできました。それ自身、私たちのめざすネットワークの発展だと思います。

これ以上の地球環境破壊を防ぐこと、「南北」の不平等を克服すること、これらは人類が希望をもって21世紀を迎えるための不可欠の条件です。環境に国境はありません。森林再生へのアジア各地の努力を支持することは私たち自身のためでもあります。

1993年4月11日、緑の地球ネットワークは、新たな夢と希望にむかって走りはじめます！　緑の地球ネットワーク・シンポジウムを成功させるため、一人びとりの力をよせあいましょう！

「緑の地球ネットワーク」の正式発足とともに、中国・黄土高原における緑化協力は「桑干河青年森林プロジェクト」との協力関係へも拡大します。

数次にわたる現地調査をふまえ、ネパールとの民間協力も、ことしはいよいよスタートします！

そして、それらの民間協力をささえる国内の体制の確立が私たちの大きな課題となります。新しい飛躍のため、ともに努力しましょう！

国境を越える緑の風
「緑の地球ネットワーク・シンポジウム」

と　き　4月11日(日)午後

ところ　(財)ピースおおさか・ホール(予定)

(JR・地下鉄森の宮駅、徒歩5分、大阪城公園内)

※正午から会員総会を行います

1部　シンセサイザーによる環境音楽　PM1：00～2：00

演奏＝矢吹紫帆さん

2部　シンポジウム　PM2：00～4：50

●パネリスト

京都精華大学教員
槌田　劭さん

京都大学教員
石田紀郎さん

アジア自然塾塾頭
稲村昭南さん

大阪外国語大学教員
深尾葉子さん

中国からの新年メッセージ

よいスタートを切って

中国国際交流協会副会長　張　香　山

「緑の地球ネットワーク」＝GENのメンバーたちは、1992年から中国山西省・渾源県の黄土地帯の緑化・植林事業に協力し、この活動を長期的に堅持していこうとしています。これはたいへん根気のいる、しかしはかりしれない意義をもつ活動です。

地球環境の保護と改善は人類の前途と運命にかかわっており、世界のすべての国・民族と人類の一人ひとりに影響を及ぼします。環境問題の解決はもはや国と地域を超えた国際的問題となっているのです。発達した国々が工業化の過程で地球環境を著しく悪化させたのであり、またこれらの国々は経済力に富み、より進んだ環境保全技術をもっているのですから、地球環境を改善するために、より大きな責務を負うべきです。

日本のGENは新しくできた小さなグループで、財源も乏しいにもかかわらず、以上の観点から〝地球環境のための国境をこえた民衆の協力〟のスローガンを打ち出し、みずからの実際行動でこのスローガンを実践に移しています。これは敬服に値します。

石原緑化協力団長と歓談する張香山氏(右)

山西省渾源県は貧しい山岳地帯であり、一人あたりの年間所得はわずか4百元くらいで、中国の経済発展の第1段階、すなわち1990年までに衣食が満足にできる生活を確保するため一人あたり年間所得を4百ドルにするという目標にほど遠いものです。したがって地元の人民は、農業生産の向上、水土流失と土壌破壊の防止のため、このあたりの立ち遅れた貧しい面目を一変させるよう、県全域にわたる植林緑化計画を作成しました。この計画に少なからぬ困難があるのは当然です。GENが渾源県人民がこの計画を実現するよう協力を決定したことは、疑いもなく地元の農民と青年の緑化植林運動に大きな励ましと推進力になることでしょう。他国の人でさえ、千里をものともせず、さまざまな不便と困難にたえ、地元で植林し、苗木と若干の資金を提供するよう力を尽くしているのに、地元に暮らしている人が、地元の植樹緑化計画に一層の努力をしないわけにはいかないでしょう。

GENのメンバーが渾源県に行って植樹緑化に協力するには、厳しい自然に直面し、それとたたかわなければなりません。これは若いメンバーたちの勤労意識と刻苦奮闘の精神を鍛えるうえで有益でしょう。同時に、メンバーが中国にいるあいだ、中国の社会と中国人民に触れ、中国の実情及び中国式社会主義の建設の現状を理解することができます。これは中日両国人民の相互理解を強化し、両国の善隣友好を深めるうえで積極的な役割を果たすものでしょう。

万事、スタートを切るのが難しい。GENは正しい方向にむかって第一歩を踏み出しました。みなさんが、粘りづよく、たゆむことなく、刻苦奮闘の精神を発揮し、前進途上のさまざまな困難を排して、すでに始められた事業を堅持していくよう、心から期待します。年月を積むにつれて、渾源の荒山寒嶺が一面の緑におおわれる日は必ずくるでしょう。　（楊晶訳）

黄土高原に緑を！　パネル展　各地で開催

全逓北大阪支部定期大会(10/3)
大阪外語専門学校（11/19～20）
●今後の予定
北市民教養ルーム(1/9～29)
五条市電話局(2/1～28)

大阪外大学園祭(10/30～11/3)

関西学院大文化祭
(11/20～23)

ピースおおさか(12/1～20)

山西省 *Overseas Report*

桑干河青年森林プロジェクトと協力を強化

高まる共同緑化への期待

GEN世話人 高見邦雄

水土流失がつくった垂直の壁

発展する青年森林工程

桑干河は、山西省北西部の山地に発し、大同盆地をうるおし、官庁ダムをへて永定河と名を変え、北京、天津の水源となって、最終的に渤海にそそぎます。古来、多くの生命をはぐくむとともに、気まぐれな暴れ河として有名でした。みなもとの黄土高原では 500㎜を切る降水量の４分の３が夏の一時期に集中し、１立方メートルあたり平均44kgの砂をふくむ茶色の水が洪水をひきおこします。そして桑の実のなる春には干上がってしまうことからこの名がついたといいます。

雁北地区の青年たちは、この河すじの緑化に力をいれています。両岸をベルト状に森林化することによって、水土流失をへらし、水質改善に役立てようというのです。このプロジェクトが成功すれば、北京、天津など下流の都市も恩恵をうけることになります。

「桑干河青年森林プロジェクト」は1989年夏の調査・計画立案からはじまり、90年春に桑干河流域の４つの県で植林が開始されました。

陽高県の護岸林	131ヘクタール
懐仁県の楊柳林	80ヘクタール
応県の護岸林	23ヘクタール
大同県の経済林	40ヘクタール

合計 274ヘクタールの植林のために１万3000人の青年たちがボランティア労働をおこない、総経費29万8000元も大衆カンパで集めました。活着率は91％にたっしました。

その後の努力をへて、92年末の植林面積はつぎのようになっています。

陽高県の護岸林	418ヘクタール
懐仁県の楊柳林	347ヘクタール
応県の護岸林	＊ 36ヘクタール
大同県の経済林	100ヘクタール
大同県の防護林	333ヘクタール

（＊印については92年分が脱落）

厳しい自然条件に抗して

実際の労働は数字以上にたいへんです。懐仁県の海北頭では河川敷とその周囲にポプラとヤナギを植林していますが、塩害がつよいため、工夫が必要です。縦・横・深さ１ｍの穴を掘り、塩害の少ない表土で根の周りを包むため、天地返しをしたり、客土したりするのです。青年たちはその作業を１人１日、15～18もこなします。そのうえ年に２回は桑干河の水を引き入れて土を洗ってやるというのです。

93年春の植林にむけて地盤整備をする青年たち

大同県徐町郷は北側を桑干河の冊田ダム、南は2000m級の山に遮られた傾斜地で、８つの村に5000人がくらしています。山の頂きから村を見下ろしてゾーッとしました。中国語では「溝」ですが、そんななまやさしいものじゃない、雨のたびに土がえぐられ、深さ30～80mの垂直の裂け目が網の目状に広がっているのです。東西10kmほどの郷に、そんな裂け目が48本もあるといえば、そのすごさを想像してもらえるでしょうか。

私たちには、これほどの水土流失を止めるなんて絶望的に思えます。しかし村に住む人はそんなこと言ってはおれません。ふもとからしだいに山の上へ樟子松を植え、村の周囲の荒れ地にも松を植えます。そのたくましさに驚いたのは、あのすさまじいの裂け目の底に、水分が多く土も肥えているといって、リンゴ、ナツメ、アンズなどの果樹を植えはじめていることです。

苗畑の共同経営を中心に

今年スタートする私たちとの協力にたいし、雁北の青年たちの第１の希望は、苗畑の共同経営です。そのための土地が懐仁県新家園郷に13ヘクタール準備されており、共青団雁北地区委員会、懐仁県委員会、私たち緑の地球ネットワークの３者が出資し、日常の管理は懐仁県委員会がおこなうというものです。良質の苗の確保は緑化事業のカナメであり、それは私たちの望むところでもあります。

第２は大同県徐町郷に協働の植林地「地球環境林」をつくることです。樹種は樟子松で、候補地20ヘクタールも示されました。この郷は交通が不便なため、苗もかなり割高ですが（１本約20円）、そのぶん私たちの協力にたいする期待も大きいのです。桑干河青年森林プロジェクトの意味を典型的に理解できる立地として、この郷は最適だと思います。会員のみなさんとじっくりご相談し、93年のりっぱな協力計画を立てたいと思います。

ネパール Overseas Report USA

勉強したい、でもお金が、時間がない

切実な水と教育の問題

「A SEED KANSAI」 学生 高力憲子

緑の地球ネットワークのみなさん。あけましておめでとうございます。

第三世界を訪れるのは私にとって今回が初めてなので、毎日驚いてばかりです。ストリートチルドレン、家族の生活と自分の学費を稼ぐ私と同じ世代の若者たち、人びとの質素な生活……などなど。そういったことを目のあたりにする度に私はどうしたらいいのか困惑してしまいます。

この間、佐野茂樹さんに連れられてBOSOという村とBHATTOANDAという村に行ってきました。どちらもカトマンドゥからタクシーで30分ぐらいの所にあるのですが、全然異なる性質をもった村でした。各々の村が持つ問題も全く違っているので、いちがいには言えませんが、水の問題、教育の問題においては共通しているといえます。BOSO村ではその上、道がよくないし、学校も小学校しかありません。そういった問題を持つ村は、ネパールではめずらしくないと聞きました。

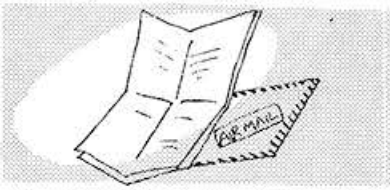
こどもたちの勉強への希望は強い

学校なんてなくても人びとが幸せに感じてればそれでいいんじゃないかと前は思っていましたが、村の人びとの周りには今の彼らでは解決しきれない問題がいっぱい山積みしていて、彼らは本当に教育を必要としています。

「もっと勉強したいけど、学校に行くお金がない、時間がない、それにネパールの教育水準は低い」と、どのネパリーも口々に言います。

日本での私の幸せな暮らしは発展途上国の人びとの上に成り立っている。国際貢献などと大声で言う前に事情を知らなくてはと思い、今回の旅に出ました。私はネパールにいればいるほどネパールが好きになりました。これからあと半月ですが、多くのことを見て感じることを大切にして、あせらず、のんびり行こうと思っています。

1993年1月1日



E・メイルで話をしませんか

ボストン大学 岡崎祐子

GENの皆さん、お元気ですか？ご無沙汰しています。ボストンの方はもう－5度C～－10度Cぐらいで、文字通り「凍てついて」います。私は地獄の学期末のまっただ中で、レポートやテストの山を前に顔も頭も凍てつきそうです。

今、アメリカの学生の間では、E－mail（エレクトリック・メール……学校や公共団体などによくおいてあるコンピューターにシステムがつないであってパソコン通信が自由にしかもタダでできる）を使ってネットワーキングすることが非常に盛んです。時間と紙とお金が節約でき、しかもそういうシステムがあるところなら世界中どこでも通信できるのがメリットです。

私も最近SEACのE-mail networkに入ったのですが、いろいろなディスカッションが毎日全米の学生からどんどん入ってきて、読むので精いっぱいです。A SEED（SEACの一部）のE-mail networkにも名前を入れてもらったので、日本のA SEEDの人や、その他の人たちともぜひ交流したいのですが、誰かそういうのをやってる人はいるんでしょうか？ たぶん大学のコンピューターなどで、そういうシステムが使えると思うのですが。もしそういう人をご存知でしたら、私みたいな者が話をしたがっているとお伝え下さい。

私のaccount addressは…yukochan @.acs. bu. eduです。

左から順にアカウント名、システム、大学名（ボストン大学）、学術団体の意味で、これを入力すると私とつながります。私の友人が名古屋大学の人とE-mailで文通しているので、多分他の大学にもあると思うのです。日本の最新の環境保護活動のことなんかも、すごく知りたいし、いろいろな人と知り合いになりたい！ やはりこちらでは、アメリカ国内の問題が中心ですので……。

最近、日本はプルトニウム輸送のことで批判されています。国内の話題としては、クリントン政権の環境保護政策に期待が高まっています。アル・ゴアの本も結構売れているみたいです。

それでは皆さんお体に気を付けて、良いお年をお迎え下さい。来年も、会報を楽しみにしております。

12月10日 ボストン

ネットワーカーズ

右から上西さん、神谷さんとつれあいの今村さん、長女の海ちゃん

農業生産法人「蒼生舎」

蒼生舎では現在、「農」の再生をめざすスタッフおよび長期研修生を募集している。
【連絡先】和歌山県有田郡金屋町瀬井934
農業生産法人蒼生舎☎0737-34-3119

ＪＲ紀勢線の海南駅から車で山道を登ること40分ほどで、共同農場「蒼生舎」の立派な宿舎にたどりついた。鉄筋二階建てである。夕闇に目を凝らすと給水塔を背にして農舎とおぼしき大きな建屋の向こうには奥行きのある鶏舎も見える。きょろきょろ見回していると、ここのスタッフの神谷さんがニヤリと笑いながら「都会から来る自然志向の人の中には藁ぶきの農家じゃないのにがっかりする人もいるんですよね。残念ながら、うちのトイレは水槽式ですし、風呂も五衛門風呂じゃないしね」と言う。確かに山村の農家にしてはイメージが違うようだ。しかもこの人の言葉は相当に流暢な東京弁である。身体つきも華奢で、泥まみれの作業服に長靴という格好でなければ、とてもこの地に10年近くも根づいて有機農業をやってきた人とは思えない。

ところが翌朝６時起床で始まった彼らの日常の農作業に参加して、そんな悠長なことはかまってられない歳月だったようだと悟らされた。ピーンと張り詰めた労働の緊張感、長年の労苦の末にそぎ落とされた無駄のない人間労働がみなぎっている感じで、一緒に働いていて悪い気はしなかった。

「蒼生舎が有機農業で立派に生きていけることを立証して、本物の農民に戻ってきてほしいんですよ。ぼくらはどんなに頑張っても所詮本物にはなれないんですから……」と神谷さんたちは言う。蒼生舎の資料に「農の再生と人間の復権を！」「有機農業の前進と確立を！」とあったが、考えてみればすごい意気込みだと思う。農業離れの著しい今日、その流れに逆らって農民を引き戻そうというのだから、普通の農民の何倍も働き、そのまた何倍も智恵を絞らねばならなかったろう。

生産現場のそうした労苦は都市の消費者にはほとんど見えない。新鮮、安全、おいしいという有機農産物への評価は、通常の何倍も手のかかる労働を少数の生産者にしわよせることにもなる。「生産者と消費者との顔の見える関係なんて、ほんとはないんじゃないか」とも感じるという。消費者側の傲慢さというものが、真面目にやればやるほど見えてくるようだ。それでも蒼生舎の人たちは黙々と消費者の所へ卵や肉や野菜を運び続けている。生産者と消費者のより良い関係をつむぎだすネットワーカーとして、もうひとつの役割を自覚しているからに違いない。

山西省の自然

石原忠一
（第一次緑化協力団団長）

⑥文官花

黄土高原の崖はほとんど垂直に落ち込んでいます。その崖にとりついて、黄土の中に深く根をおろして茂っている樹があります。谷底から見上げるときりたった崖の上の方を飾っているので「文冠樹」だなと合点しました。ムクロジの仲間で、中国黄土地帯特産です。

ところでなぜ黄土高原の崖はこんなに垂直にきりたっているのでしょう。ちょっと文献をひもといてみました。「シルクロード」という言葉をはじめて使った人はドイツの地質学者、Ｆ・リヒトホーフェンさんです。1860年、アロー号事件のあと、清朝末期の中国各地を約10年間にわたって探検して、大著の「China」を刊行しました。その中で、黄土は氷河期以降、西方の乾燥地帯から運ばれてきた風成層であることを証明したのです。

時代は下って1914年、中華民国の新しい北京政府に招かれた、スウェーデンのＪ・Ｇ・アンダーソンさんは、12年間中国地質調査所を根城にして、北京原人の周口店や新石器時代の仰韶文化を発掘するなど、中国考古学の扉を大きく開いた人ですが、その名著「黄土地帯」の中で、リヒトホーフェン先生の次の説明文を引用しています。

「黄土では、夏季の豪雨も一部が地表を流れるだけで、大部分はスポンジか巨大な濾過器に似て黄土層を通って基盤に達する。こうして黄土の下部は水に浸って薄い粥のようなドロドロ状態になる。そしてこの底層は徐々に移動しはじめ、わずかな勾配でも容易にすべって渓谷へ落ち、それにつれて、比較的乾いている上部の黄土層が垂直に沈降する」。

氷河期を生き延びて分化した、またの名「文官花」に生命のたくましさをおぼえます。

会員からのメッセージ
GREEN ECHO

「ピースおおさか」でパネル展をみて

農協職員・川上四郎

今、環境問題は地球規模の課題となっていますが、12月8日GENの主催する「黄土高原に緑を」パネル展を見学して、私は一農業指導者の立場からいろいろ考えさせられました。

中国の広大な黄土地帯を緑化することは、長い年月のかかる大変なことです。展示された写真を見て感じたことは、中国では自分の子や孫のために緑化活動を懸命に行っているということです。緑化活動が沙漠化を食い止め、黄色い大地を豊かな緑にすることで自然に美しい水が確保でき、新鮮な農作物を生産する環境を整えることができるということです。

豊かな緑に囲まれたわが国では、生産環境が整っているように見えますが問題が山積しています。大は、農産物の輸入自由化にどう対応するかといった問題から、小は、地球温暖化による異常気象で野菜が大豊作、価格低迷で農民の生産意欲が減退しているといった問題まで、さまざまです。

中国でも緑化を推進する上ではいくつも大きな困難があるでしょう。黄土高原の土壌はアルカリ性のため、中性に土壌改良することが必要だと思いますが、なかなか大変でしょう。一口に緑化といってもさまざまに苦労はつきないものだと思います。

黄土高原のパネルを見て、緑の地球ネットワークの活動を一人でも多くの人が理解し支援の輪が広がることを期待しています。

ネパールで風邪をひいて考えたこと

学生・杉本大三

風邪が治りません。アジア自然塾とのアンナプルナ内院行きも参加を見合わせました。身体の調子が余り良くないときというのは、やたら移動したくなるものです。また移動の緊張感からか、身体もいつの間にか治ってしまうことが多いのです。今回も無精に動きたくなって、ポカラまで来てしまいました。移動欲は満たされましたが、身体の方は治りませんでした。カトマンドゥ―ポカラ間（特にムグリン―ポカラ間）のバスの揺れはすさまじく、かえって疲れがたまり調子が悪いです。

でも、ポカラで2～3日寝ていたら元気になりそうな気がします。ここはカトマンドゥに比べてとても空気がきれいです。カトマンドゥから逃げたくなったもう一つの理由は、あの空気の悪さです。身体の元気な時は何も感じなかったし、インドのデリーやジョードプルに比べたらまだましかという気でいたのですが、風邪をひいてからはこたえました。身体は依然シンドイですがあの空気から解放されただけでもほっとしています。

風邪をひいているので用事のないかぎりベッドで横になっています。寝ていて気になるのがマクラです。今のホテルの枕はスポンジのかたまりに布を被せたものです。これまでネパールで4つのホテルに泊まりましたが、多分全部スポンジの枕だったように思います。先日、SAPING村へいったときに、薄いながらも綿の入った枕で寝ることができて少し感激しました。スポンジはスポンジだけのことはあって、やわらかいのですが、頭にぺたっとなじまず落ち着きません。

カトマンドゥは結局すべてが観光客（外国人）の方を向いている街だったようにおもいます。今のカトマンドゥの安直さがスポンジ枕のイメージと重なります。

1993年1月1日　ポカラにて

たより　たより　たより　たより　たより　たより

わたしの炭焼き体験記

学生・宮下浩美

但馬の大森さんの家をたずね、初めて農家の生活にふれることができた。

まず家の前で回っていた水車に目を奪われた。メェーという声に振り返るとヤギがいた。鶏が元気に飛び跳ねる姿も見える。豚も羊もいる。田んぼの虫を食べてくれるという合鴨が小さな流れに群れている。母屋の隣には「パン工房」という手作りのパン焼き釜があって、天然酵母のパンが焼かれる。このパンは全国に発送され大森さん一家の貴重な収入源になる。野菜や米ももちろん作っている。こんな自給自足の生活を私は初めて見た。

着いたその日に炭焼きを初体験。といっても、それは本当に大変な作業だった。炭になる原木を山中から伐りだしショイコで運び、大きな木は斧で割る。これだけでも大仕事。薪を窯にいれ火を焚き付けること一昼夜。窯の中の温度はやがて1000度を超す。中を覗くと炭はゆらめく炎の中で黄金色をしていた。燃えたぎる炭を素早く取り出し、灰をかぶせる。熱との戦いだ。このとき髪は灰で真っ白、鼻の穴は真っ黒になる。そんなわけで、作業後にはいった五衛門風呂は格別だった。

大森さん夫妻は以前は都会で普通の生活をしていたが、ある時子どもが土を見て泣きだしたのを機に現在の生活に踏み切ったのだそうだ。何もないゼロからの出発で大変だったが、いろんな人の助けがあったからこそと大森さんは言う。6人の子どもたちのくったくのない笑顔を見て、ああ幸せそうだなぁと思った。

兵庫県但馬の大森さん宅

GEN朝まで討論会

結論なし！　でも……問題の整理に役立った

12月12日（土）に始まった「GEN朝まで討論会」は、その名称に反して（ではあるが、予定どおり）13日の昼まで行われました。会場の「日中友好の家」には延べ27名が集まり、それぞれの個性をぶつけあいました。討論の全貌を伝えることは、紙面の都合のみならず、私の能力をも超えているので到底できませんが、主な論点、意見の一部を記し報告としておきます。雰囲気だけでもお伝えできれば幸いです。

※中国の緑化よりも日本の農業の方がわれわれにとっての環境問題としては重要だ。自分の足元の問題を解決できないで、他国の緑化がどうしてできるのか。※なぜ、中国の緑化なのか？

※農村が衰退し都市に人口が集中するという問題は日本にも中国にもある。国境の枠で考えるのではなく、環境を破壊する社会の構造と地域との関わりから取り組むほうがいい。なぜ中国なのかではなく、なぜ渾源なのかというふうに問題は出されるべきだ。そこには日本の農業に通じる問題が見えてくる。※アジア以外には、いろいろ取り組んでいる人びとがいるので、私（たち）はアジアにこだわりたい。※木を植えるのと、人の関係とどちらを重視するのか。※木を植えることを通じてつながっていこうとしているのです。

※穀物は1年で収穫するが、樹木は50年くらいかかるので、世代を超えたつながりが必要になる。木を植えることによって人が変わっていくことが重要だ。※いや、私はそんな先のことより今楽しいことの方が大事だ。※今植林を必要としている人びとがいる、その人びととの関係を考えたい。※私が木を植えるのは、やりたいことをやる、一人でできないことはみんなでやる、やられては困ることには反対する、というレベルの話だ。自分で感じられないことを語れば、空論になる。

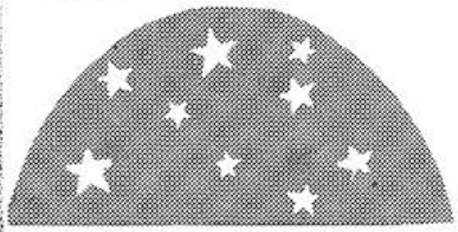
その他、「緑の地球ネットワークはネットワーク・プラス情報センターの機能を持つことが必要」「ネットワークで国内にログハウスを造ろう」「1993年は国際先住民年だ。環境問題にも深く関係している。ウタリの問題にも取り組もう」「入門用のビデオやパンフレットを作ってはどうか」など、多くの提案もありました。

結論のない討論会でありましたが、少しは問題の整理に役立っただろうと思っています。

（報告・文責）世話人・川島

柴刈り体験してみませんか

●とき　1月24日（日）朝9時20分
　　阪急宝塚線池田駅集合
●ところ　府立総合青少年野外活動センター
　　電話0727-34-0500
●参加費　大人 700円、子供 500円



冬の星空観察会

～自然と親しむ会～

●とき　1月30日（土）～31日（日）
●ところ　滋賀県北小松・星の博物館
●参加費　1泊2食　5000円

申込みはGEN事務局・東間まで
15人まで先着順で受付ます。

編集後記

年末にひいた風邪がまだ治らず、編集作業へと突入しました。頭がまわらず手間どってしまい、レイアウトも今回はサエません。読者の皆様もくれぐれも風邪などひかぬようご注意ください。へーへックション！（永園茂樹）

暮れから一週間、和歌山県の山村の農場でニワトリの世話をしてすごしました。縁起担ぎではありませんが、今年の干支は酉ですからきっと良い年になると思います。今年4月にGENも正式発足の予定です。地球環境にとっては厳しい年でしょうが、力をあわせて少しでも人類の前途に光が見えてくるよう頑張りたいと思います。（T）

GEN事務局では、読者のみなさんに一緒に活動していただきたいことが山ほどあります。会報は毎月15日発行です。発送作業でヒーヒーいっています。手伝って下さる方、前日までに電話してください。交通費はお支払いします。編集スタッフも不足気味です。ワープロ入力や割付けのできる方、手伝って下さい。（編集スタッフ一同）